

## 牧が花観照寺と解良家

良寛は45歳の享和2年（1802）と53歳の文化7年（1810）の二度ほど、牧が花観照寺に仮寓したようである。牧が花には、村上藩の庄屋役をつとめる解良家がある。良寛と交流があったのが、十代目の解良叔問（喜惣左衛門栄綿）である。

叔問は篤実な人で、良寛は「当代の善人」と賞めている。叔問は五合庵や乙子神社草庵に食物や着物を届け、良寛の面倒をみた。良寛も同家にしばしば立ち寄り、その関係から解良家の墓がある観照寺に仮住したことがあるという。

解良家には良寛からの礼状や無心の手紙があり、鍋の蓋に書かれた「心月輪」も伝わる。叔問は良寛62歳の文政2年（1819）、59歳で没した。良寛は法華経や賛偈を書いて、遺骨とともに墓中へ埋めたという。

叔問没後、次子が家督をついだが、いずれも若死し三男の三郎兵衛栄重が十三代をついだ。栄重は良寛五十三歳の文化七年（一八一〇）に生まれ、良寛が亡くなった文保二年（一八三一）には二十二歳であった。のちに栄重は良寛の逸話集である『良寛禅師寄話』を書き残した。